

## ●特別寄稿

# 大鍋会の宇宙

渡辺欣雄

いついかなるときに発足したのか、何とも妙な名前の会、《大鍋会》というのが跡見という家の文化人類学という神棚Ⅱ仏壇の一角にいま存在している。これは跡見学園女子大学文学部文化学科学科文化人類学専攻の一期から三期までの卒業生の集会である。彼岸やお盆の日ではないが、跡見は文化人類学の始祖Ⅱ祖先神たちが年に一度諸々に着かざって、東京近郊に集うのである。《大鍋会》とはオオナベカイと称するが、これは誰が命名したものやら、記録を常とする私にしても記憶は定かではない。ただし由来ははっきりしていて、われわれが跡見に在学していた当時、ワタナベ先生というのが二人おり、発音の識別にこまった学生たちが、渡部武先生のことをチイナベと俗称し、私のことをどうもオオナベと俗称して区別していたらしい。それがそのまま世に公認(?)されて、この名称を生んだようである。だから別段、ひとかかえもある大鍋を囲んで共食するような会なのではないが、料理を囲んでの敵かて華やかな宴が《大鍋会》の名のもとに催されているのである。

《大鍋会》は、性格のいささかかわった文化人類学のゼミ担当者Ⅱ渡辺欣雄に苦しめられた、文化学科卒業生のいわばちいさな同窓会である。しかしこの同窓会も、専ら私が原因で、この二年ばかりは集いが催されていない。二年前には、私が台湾で交通事故に遭うという不幸があつてで、また今年は、大鍋会の準備が万端整った矢先に、私が実父を亡くして中止となつてしまった。不幸は重なるものだ、とはよく言うが、しかし大鍋会の会合はこれで永遠にお流れになつたというわけではない。跡見に文化学科のあるかぎり、そして文化人類学のあるかぎり、おそぶる神の源として君臨しつづけることであらう。

ここ二年は私の不幸で中止になったが、大鍋会構成員の年々の成長については消息があり、成長していないのはオオナベ自身であるとの自覚を増している昨今である。大鍋会のメンバーの想い出は深いもので、在学中一期生らは、一度「コンパ」なるものを経験してみたいと私に訴え、「コンパ」とはこういうものだと言ったことがある。わが宴の文化人類学講義のみならず、その実習をも指導せねばならぬとは、いささかあきれたものだったが、いまは家庭や社会で彼女らが宴の第一線を経験しているであろうと想像すると、課外授業もあながち棄てたものではなかったと思われる。

また文化人類学ゼミの二期生らは、文化人類学をその思想的背景(?)にもつ学生運動家が少なからず、やがて鶴原寮まで赴いて、大学問題をも討論しようという勇士までがた。いや、学生運動家というのはいささか大げさに言過ぎで、はじめに授業に出席しながら、学生会の活動にも責任を果してきた淑女たちにはかならないであろう。鶴原寮で夜おそくまで議論し、私のつくった大学問題資料をたたき台に、跡見の理想像とともに夢見たのである。謳いあげた《反骨精神》なるものが、いまは二期生の《自律精神》に役立っているように感じてまことに嬉しいかぎりである。

わが三期生は何と四人。文化人類学には忍耐力や持久力が必要だといひ、他方で具体的にはアルプム用の写真撮影まで、参加協力を拒む私にアイソをつかしたか、一期十八人、二期六人、三期四人とゼミ参加者希望者の人数は年々減少の一途をたどり、おかげでそれだけ三期生は私の息吹きのかかった教育をうけてきた者たちだった。三期は換言するなら精鋭揃い。まことにもって現在の私の境遇からするなら、うらやましいかぎりであった。現在私の属する武蔵大学は、ゼミ教育を主眼とする大学で、だから私の学科には一年生からゼミが設けられてはいるが、この大学においてさえ参加学生は平均十六名であり、理想を現実化するには跡見の比ではないという矛盾がやどっている。こんな矛盾を日々考える私にとって、かの三期生のゼミ活動は、二度と実現できぬ過去の理想であった。だから三期生こそ、鬼の渡辺を崇め奉ってしかるべきではあるまいか。

四期は大鍋会の視野にはないようだが、二期にも似て文化人類学と大学とを併せ考える人材が多かったのを覚えてゐる。四期は私がひと足先に跡見を《卒業》してしまつたことでもあり、私にしては充分《反骨》的教育をゆきとどかせることができなかつた。跡見を辞める前年は、私が大学行政の一端を担わざるをえず、学生もまた学生会を背景にして跡見改革の先鋒に立つてゐた。四期生と私とはともに跡見の《事件史》の片隅に位置づけられて然るべき存在であつた。幸い四期生は、後任の藤崎康彦先生の《正常》な指導をうけられることになり、新時代の跡見を担つたはずである。

《大鍋会》の万神殿を紹介しようと思ひながら、ついつい彼女らの学生時代の想ひ出を綴るかたちとなつてしまつた。卒業後の彼女らは学生時代にもまして、各地で充実した生活を送つてゐるであろう。私も跡見の時代とは違つた新しい理念のもとに研究教育を行なおうと日々これ努めてゐるのであるが、初体験の教壇とは、何とも影響が大きいもので相も変わらぬ跡見で描きつづけてきた大学の理想像の亡霊にとり憑かれて離れられないでゐる。武蔵大学とは理想主義の大学で、やれ東西文化の交流だ、やれ世界に雄飛だ、やれ自ら調べ考えろだと、建学の三理想とやらを掲げるが、現実はどうかといへば《ゼミ教育の武蔵》であるといふことさえ崩壊しがちな学生の三無主義・五無主義の壁につきあたつて、理想はヌーメン化し冷笑の対象と化してゐるのである。だから学生たちに対しては、いまもつて《鬼の渡辺》として驚異の対象となり、《反骨》と《逆説》の私の理論は、学生たちにとってはA単位獲得をばむ鉄のカーテンの象徴としておかれつづけてゐる。

私の成長があまりみられないなかで、跡見にはほとんどみられなかつた現象を武蔵でみなかつたわけではない。私の自由奔放な研究教育を許す武蔵には、この鉄のカーテンをくぐりぬけてわが陣地へ侵入しようとする学生を生みうる余地があつたことである。跡見のものはや伝統であり世に知られる特色となつた民俗学・人類学の定期的な共同調査にはもちろん及ぶべくもないが、これとは質的にことなる不定期的な長期調査の実験場が、武蔵にころがってゐた。それは教育をもととするより、われわ

れ研究者による一級の研究主体の共同調査をしえたことであり、学生たちにもまた大学の費用を利用して参加を認めた形式の調査を許しえたことであつた。地域は沖繩、期間は二カ月余、参加学生はゼミ有志五名という、教育はまったく無視の調査を昨年実施した。結果は彼らの卒論を読むまでもなくあきらかたで、私の講義やゼミで私が言わんとすることを、かれら参加有志は理解が容易なばかりか、対等の議論にも及び、おかげで私は寝た子をおこすような大学院時代の緊張をしばしば味わつた。われわれの研究が、研究のみが教育効果をあげたのである。かつて私が跡見で学生に説いたこと、すなわち学者としての教員の研究と、学生自らの研究とが相互作用を及ぼすとき、教員がたとえ教育や指導を意識しなくとも、それが結果として教育効果をもたらすということ、この理想が現実のものとなつたのには、私の方が却つておどろいた。われわれも学生も研究の追求が教育となり学習となること、このきわめて異常な実験が、私の理想の一端を現実のものとしたことは、教育が時限化・大衆化し、学習もまた儀式化していく今日、ますます聖化されてゆくにちがいない。研究教育の理想を実現しようと努力すれば、今日でもなお実現できるのであるが、ただしその努力を恒常化するには、大学教育はなおまだサービシ業の域を脱していない。それに教員同志の相互の研究理解や協力は、《常識》とか称するバランス感覚がはたらきすぎていて、却つて阻止されなかなか実現されるところがない。それが現実なのだから、性格異常の文化人類学者はアナーキーである分だけ、大学の理想のブラック・ボックスを担いつづけてゆくことになるであらう。

《大鍋会》が異郷を夢見つづけ、文化人類学者という異人に接し、その異常な世界を知つた者たちの集まりであるかぎり、なんとかしてわが貴重な異文化の伝統を今後とも保持したいものである。わが《大鍋会》の諸姉！ オオナベはまだこのように異様で血気盛んである。だからまだまだ安心していてくれたまえ。